



FUKUSHIMA 市民インタビュー

このコーナーでは、福島市のさまざまな分野で活躍する人や団体を紹介します。今回は、本市で地域農業の振興を通じて、地域の活性化に貢献している個人・団体を表彰する福島市農業賞で農業奨励賞(次世代農業者部門)を受賞した「果樹園きつない」の橘内義知さん・望さん夫妻にインタビューしました。

🐰 就農したきっかけは？

私の家は、戦後から続く果樹農家(サクランボ・モモ・リンゴ)で、子どもの頃から家業を継ぐんだらうなと思っていました。神奈川県で農業土木を専攻し、卒業後は「福島に戻ったときに役に立つ仕事を」と、横浜市の青果市場に就職しました。9年前、結婚と同時に福島へ帰って就農しました。私も妻もゼロからのスタートで、共に支え合って、手探りで仕事を覚えていきました。

🐰 活動内容は？

家業の他に、震災の1年後に設立の「ふくしま土壌クラブ」に所属し、さまざまな業種の方や他県の方が来福したとき、逆に他県に行ったときに震災後の福島の農家の取り組みを紹介してきました。また活動していく中で、福島の農業を支援し



果樹園きつない
橘内 義知さん・望さん夫妻

🐰 大事にしていることは？

市場に勤めていたときに「ふくしま土壌クラブ」を通じて、全国の有名な農産物の産地の方々と交流してきました。話を聞くと、その農産物は地域でも愛されていて、生産者はそのことに誇りを持って作っていると感じました。おいしいものをたくさんの人へ届ける仕事の意味をその方たちから学び、その気持ちも、今も仕事をしていく上で生きていきます。

🐰 これからしていきたいことは？

絵本の制作も、農業の魅力を伝えるというよりも、子どもたちに、自分の地元には自慢できるものがあるんだと気付いてもらいたい、ふるさとに誇りと自信を持ってもらいたいという思いで作りました。

たいという企業からご協力をいただき、未来を担う子どもたちのために福島のモノの絵本を制作しました。その絵本を幼稚園や小学校、図書館、病院に寄贈しました。



子どもたちに読んでほしいと制作した「あかつきむらのももばたけ」

くだものを「おいしい」と食べてくれる人たちのために、誇りと自信を持っておいしいものを作り続けていきます。また、絵本のように、次の世代へとつながっていく活動をこれからも続けていきたいと思っています。「くだもの」という言葉を「SUSHI」や「BONSAI」などのように訳さずともそのまま世界で通用する名称にしたいというのが自分の夢です。外国と日本ではくだもの1つに対しても手の掛け方が違います。日本のくだものは大事な人へ自分の心を贈るギフトにもなります。日本の「KUDAMONONO」が海外で評価されて、もともとあったくだもの価値に気が付き、福島の皆さんが、ひいては日本中の皆さんが自信と誇りを持ってくれたらうれしいです。



We Love ♥ ふくしま！ 第13回『スポーツで活気を』

東京2020オリンピック・パラリンピックの開幕まで1年半を切りました。福島市では、野球・ソフトボールの7試合が開催され、ソフトボールの試合は全競技の先陣となります。

復興五輪を私たち自身の手で盛り上げていくため、「2020ふくしま市民応援団」をつくりました。自分たちにできることを通じて、ムードを高め応援していこうという制度です。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

いま、本県のスポーツが熱くなっています。正月早々、尚志高校サッカー部が全国3位。都道府県対抗駅伝では本県男子チームが初の優勝に輝き、県内中が沸きました。スポーツは、県民を一体化し空気を明るくします。

福島市出身では、大波三兄弟の次男若元春が幕下で全勝優勝し、春場所で十両昇進が決定しました。春場所では、十両6場所目となる三男若隆景とともに、兄弟関取が誕生します。長男若元元も、初場所の幕下で好成績。3人とも締まった体

つきで、切れのいい相撲を取ります。史上2組目の三兄弟関取の実現に向けて、市民を挙げて応援していきましょう。

また、レッドブル・エアレース2019の開幕戦で福島市在住のエアレース・パイロットの室屋義秀選手が優勝、最高の滑り出しを見せました。年間世界王者の奪還に向けて強力に後押ししていきたいものです。

そして、3月9日、サッカーJ3が開幕します。松田新監督を迎えた新生福島ユナイテッドFCの大いなる躍進を期待します。やはり応援が大切。昨季のホーム平均入場者数は1,576人、戦績と同じ12位でした。まずは目標2千人、スタジアムに足を運び、チームを鼓舞しましょう。サポーターが一体となって、声援を送ったり歓喜したりするのは面白いものですよ。

新年度は、市民が楽しむスポーツ環境を充実します。若い人も、お年寄りや障がいのある方も、生涯取り組める環境を整備していきます。

もうすぐ8回目の3.11。鎮魂と回顧を忘れず、そしてこれまで以上に明るく前を向いて進んでいきたいものです。

福島市長 木幡 浩